

【スケジュール】(予定。詳細は10月1日発行の次号会報でお知らせします)

初日 (11月25日 水曜日)

午後 海外からの事前登録受付
尊厳死協会世界連盟理事会
ウェルカムレセプション
(世界連盟理事、日本尊厳死協会役員)

2日目 (11月26日 木曜日)

世界連盟総会
開会式 日本尊厳死協会 北村義浩理事長挨拶
世界連盟 Asunción Alvarez 会長挨拶
午前 基調講演「世界連盟 歴史とともに歩んだ50年の発展(仮)」
Rob Jonquiere 世界連盟前事務局長
基調講演「苦痛からの解放をめぐる社会的挑戦」
Sean Davison 世界連盟元会長

午後 特別講演 柳田邦男氏 (ノンフィクション作家)
シンポジウム1 東アジアにおける終末期医療法制度
セッション1 一般演題「自立の歴史・哲学・教育等、分野横断テーマ」

3日目 (11月27日 金曜日)

午前 シンポジウム2 尊厳死：医療介助死・緩和ケア・鎮静・自発的飲食停止
(文化・歴史・倫理的背景の多様性と相互理解)
セッション2 一般演題「日本における終末期ケアの社会的・関係的側面」
セッション3 一般演題「医療介助死の国際比較」

午後 シンポジウム3 認知症とリビング・ウィル
シンポジウム4 人工的な栄養と水分補給の差し控えと撤回
セッション4 一般演題「医療介助死の社会的実践とケア」
記念講演 日本尊厳死協会創立50周年にあたって

4日目 (11月28日 土曜日)

午前 自由交流セッション 映画上映「痛くない死に方」
もしバナゲーム (もしもの時を考えるゲーム)
医療相談コーナー
法律相談コーナー
セラピードッグとのふれあいと実演



【登録と参加費等のお知らせ】

登録 大会に参加するには事前登録が必要です、登録は協会ホームページの大会特設サイトからお願いします。

参加費 全日全プログラム聴講可能・昼食なし：協会会員 3 千円、一般参加者 5 千円
全日全プログラム聴講可能・昼食付き：2 万円 (同伴家族 1 万円)
3 日通し券のみの発行で、単日券はありません。

記念品 ご参加の皆さまへの記念品として、会報で人気の「四季の歌」を1冊にまとめたオールカラー写真歌集 (英語版付)、さらに協会 50 年の歴史をまとめた記念誌『年表が語る協会 50 年の歩み』を大会バッグに収めてお渡しする予定です。

会場では、くつろいでお過ごしいただけるよう、茶菓もご用意しております。
この特別な機会に是非ご参加いただき、学びと交流を深め、お楽しみいただければ幸いです

MY LIFE,
MY CHOICE
わたしの人生、
わたしの選択

11月25〜28日開催 会場：都市センターホテル

「第26回尊厳死協会世界連盟
東京大会2026」迫る！

スケジュールの概略、固まる

今回のテーマは「MY LIFE, MY CHOICE」

(自分の最期のあり方は自分で決める)。

50年前の第1回東京大会で、世界連盟の活動目的として

高々とかがげた「東京宣言」からちょうど半世紀が経ちました。

この間、世界各国・地域では「患者の権利法」や

「終末期医療指示法」などの名称でリビング・ウィルに関する

法的枠組みが整備され、それぞれの歴史や文化、

風土などの多様性に合わせて

「自己決定に基づく良き死」を目指して進んできています。

そうしたなか、日本もリビング・ウィルの法制化に向け、

その機運を大きく高めるべく、あらためて原点の地・東京から

「尊厳死のメッセージ」を世界に発信していく大会を開催します。

大会まであと4か月ほど。4日間のスケジュールの概略も固まり、

準備は着々と進んでいます。そのスケジュールと、

これまで日本で開催された3回の大会と第1回大会での「東京宣言」、

さらに前回の「ダブリン大会の模様」などを併せて掲載してお伝えします。



会場となる東京・都市センターホテル

尊厳死協会世界連盟とは

「尊厳死協会世界連盟 (World Federation of Right to Die Societies)」は、人生の最終段階における自己決定や尊厳死を推進する世界30カ国・60団体以上が加盟する国際的なネットワーク。各国での法整備やリビング・ウイル(事前指示書)の普及、倫理的な課題について情報共有や議論を行っている国際団体です。日本からは「日本尊厳死協会」だけが加盟。基本理念として「いかなる死を選ぶかは個人の決定に委ねられ、自分の意思を表明するリビング・ウイルは基本的人権として尊重されるべきである」を掲げています。



協会がスタートしたその年の8月に国際会議を主催した

日本ではこれまで3回開催

①「第1回世界国際会議・東京大会」(1976年)

協会設立わずか2か月後に「国際会議開催」決定！
今の日本尊厳死協会の前身である

「日本安楽死協会」が設立されたのが1976年1月。そのわずか2か月後の3月に「8月国際会議開催予定」と決めて準備に入り、8月23、24の両日、東京で第1回国際会議(毎日新聞社後援)の開催に至りました。参加者はアメリカ、イギリス、オランダなどからの招待者12人、国内代表19人。議題は、この年の3月にあった「カレンさんの裁判」(「カレンさんの生命維持装置を外すことを認める」という、自己決定権を重んじ患者には生を最終する権利があるとするアメリカ州最高裁判決)などでした。この判決は全米の各州に、患者の意思を尊

東京宣言

人間の権利と自由を確信し、品位ある死の権利を保有する。人がいかなる死を選ぶかは、自らの決定にゆだねられるものであって、死の別れに伴う悲しみのほかには周囲の人々に害を及ぼすものであってはならない。個人の願いの表明または「生者の意志」は人間固有の権利として尊重されるべきである。従ってこの種の書面が法的に効力を持つことを要求、当面立法化に努める。今後情報交換のため国際会議を定期的に関き、目的を達成したい。(要旨)

②「第9回世界国際会議・京都大会」(1992年)

同時通訳が活躍、反対デモも



同時通訳のヘッドホーンで聴く参加者

10月23〜26日、国立京都国際会館で第9回大会が開かれました。15カ国、19団体の代表28人をはじめ会員たち約900人が参加。日英同時通訳が活躍し、参加者はイヤホンで聞き入りました。開催中、新左翼のデモ隊が会場外で「弱者切り捨てになる尊厳死反対」のシュプレヒコールを繰り返しましたが、講演が中止に

なるには至りませんでした。デービス世界連盟会長は「末期患者の意思に従ってよりよい死を迎えさせることが医師の務めである」と主張しました。

③「第15回世界会議東京2004」

世界会議みたび日本に

9月30日〜10月3日、東京・都市センターホテルで、欧州7、北米2、

南米1、オセアニア1、アフリカ1の12カ国、17団体からの代表50人を含む約500人が参加して開催されました。基調講演では厚生省医政局長の岩尾總一郎氏(現尊厳死協会名誉会長)が「日本の終末期医療の今後のあり方」を講演。開会式では奥田碩・尊厳死協会顧問(日本経団連会長)が「違いを受け入れる社会に尊厳死は象徴的な存在」と尊厳死の根源をわかりやすく解説しました。



上/開会式であいさつする奥田顧問
下/分科会では参加者同士も討論

「前回は第25回ダブリン大会2024」の様子 「次回の東京開催」が満場一致

2024年9月19〜21日、アイルランドのダブリンで開かれ、日本尊厳死協会からは北村義浩理事長はじめ満岡聰、上別府圭子、神馬幸一の各理事が出席。「2026東京大会」の招致活動を行い、満場一致で東京開催が決まりました。

大会は初日が世界連盟主催の総会。70人ほどが参加して予算・決算、さらに理事や次回開催地の選挙などが行われました。2日目、3日目はア

イルランド協会主催で、初日よりや大きな部屋に用意された20ほどの円卓に100人程度が参加してのカンファレンス。2日にわたり多くの演者が安楽死、尊厳死等に関する発表を行いました。

「日本の学会のように系統的にまとめるということではなく、各国各人がそれぞれ自由な意見を発表するよいうな感じ」と参加した理事は報告しています。



「ダブリン大会」に参加した満岡理事、一人おいて北村理事長、上別府理事(左から)



上/北村理事長による東京招致演説
下/各国の参加者との懇談シーン

